［研究ノート］

短期留学生の人的ネットワークの研究

――韓国からの三人の短期留学生に対するケーススタディ――

崔慧璘・加藤好崇

1．本研究の概要

1.1　本研究の背景

海外での日本語学習者は，母国で外国語として日本語を勉強するだけではなく，日本に行って日本文化に触れながら日本語を勉強することを望んでいる。日本に来る留学生には，大学間の交換プログラムなどで，短期･長期に留学をする学生もいれば，大学･大学院への正規留学を希望して来日する学生もいる。後者の留学生は主に大学あるいは大学院への入学を目的とし，専門分野での研究を目指すのに対して，前者の場合は主として大学間交換協定に基づいて留学し，母国の大学に在学したまま，日本の大学で教育を受け単位を取得する。本研究の協力者である韓国のH大学からの交換留学生も，H大学の学生であるが留学先である日本のT大学の日本語研修課程に半年間在籍している。本稿でもこういったシステムに基づく半年間のみの滞在であるので，これを「短期留学」と呼ぶ。

そのような短期留学生にとって文化体験の機会を与え，社会文化能力の習得に大きな役割を果たすのは人的ネットワークであろう。内海ら（1999）も短期留学生の目的は専門の授業の履修と同時に日本文化を直接体験し，日本語習得を図ることであると述べている。また，大学間の交換プログラムなどで，短期･長期に留学をする学生にとって，教室外の日本語実際使用場面を確保し，日本語使用ネットワークを広げることは，日本語習得と留学への満足度に大きく関わる課題となっていると述べている。しかし，短期間の留学では日本人とのネットワーク作りは容易ではないのもまた事実であろう。

1.2　研究目的

本研究では，韓国人短期留学生が実際にどのように人的ネットワークを形成しているかを調査し，それを維持するためにどのような調整をとっているのかについて，インターアクション・インタビューの手法を用い，縦断的調査を行った。

本稿は，関東圏のT大学に短期留学している韓国人留学生の協力を得て，彼らがいつ，どのような人的ネットワークを形成し，それが日本語学習や日本文化の理解にどのような影響を

及ぼしたかをインタビューを通して縦断的に調査を行ったものである。４ヶ月間である短い留学生活をどのように有効に活用しながら，ネットワークを形成し，かつ維持していくのかを分析していく。

具体的に本稿で取り上げるのは，紙幅の関係上，以下の点に絞る。すなわち，ネットワークの形成者，ネットワークの媒体，ネットワーク形成の阻害要因と促進要因，ネットワーク維持の阻害要因と促進要因の四点である。

２．先行研究

ネウストプニー（1997：181）はネットワークとは，参加者がどのように配置され，どのように関わりあっているかということを意味するものであると定義している。また，武田（2002：71）はネットワークは学習者の実際使用の場面になりやすく，授業や本から学ぶのとは違う経験を得られる可能性があると述べている。ネットワークには人と物との関わりである物的ネットワークと，人と人との関わりである人的ネットワークがあるが，本稿におけるネットワークとは後者の人的ネットワークのみを指す。

加藤・谷部（1997）は，短期留学生２名にインタビューを行い，どのような学習ネットワークを形成し，それが日本語学習や日本理解にどのような影響を及ぼしたかを記述している。内海・吉野（1999）では，短期留学生が大学の長期休暇中にどのような日本語実態使用場面に参加していたかを調べ，ネットワークの観点から分析した。学習者が充足するネットワークとはどのようなものなのかを目的として調査をし，様々なネットワークでも「強い」ネットワーク，「友だち」のネットワークがあるかどうかが重要なポイントになると述べている。朴（2004）の研究は，国内留学生のネットワークの構築を状況的学習論の観点から探り，ネットワーク形成及び発展への新たなアプローチの可能性を探ることを目的としたものである。分析の結果，価値観によって形成されるネットワークのタイプが異なっていたと報告している。

３．本研究の理論的枠組み

3.1　インターアクション能力

現代社会における日本語教育は，語学教育だけでは十分ではなく，インターアクション教育でなければならないとネウストプニー（1995a：10）は述べている。つまり，正しい文法を使うだけではインターアクションは成立しない。インターアクション能力とは言語能力，社会言語能力，社会文化能力の３つの要素[1)]を含み，言語能力と社会言語能力から構成されたものがコミュニケーション能力と呼ばれる（ネウストプニー1995a）。

インターアクション能力を海外における JFL 環境で十分に学習することには限界があろう。しかし，日本人との接触が頻繁である JSL 環境ではこれらの能力を習得できる可能性もある。したがって，JSL 環境においては，インターアクション能力習得のためにも，学習者と母語話者との人的ネットワークが重要な鍵となることは容易に想像できる。

本研究では，以下の４つの項目に沿って人的ネットワークの分析を行う。

１．ネットワークの形成者
２．ネットワークの媒体
３．ネットワーク形成の阻害要因と促進要因
４．ネットワーク維持の阻害要因と促進要因

これらの項目に沿って，短期留学生がどのようなきっかけでネットワークを形成し，維持していくのかを参加者や媒体などの分析を基に考察を試みる。

3.2　言語管理理論における管理プロセス

本研究では，３名の短期留学生の人的ネットワークを研究対象としているが，その分析を行なう枠組みとして言語管理理論の「管理プロセス」（ネウストプニー1995b）を理論的枠組みとした。管理プロセスはある場面の規範からの逸脱に始まり，その逸脱を調整するまでの流れであり，言語問題を分析する上でのツールである。

管理プロセスは，まず規範からの逸脱から起きる。次に，逸脱に留意する場合と留意しない場合がある。留意した場合はその逸脱を肯定的に評価するか，もしくは否定的に評価をする。否定的に評価をした場合，その逸脱に対する調整を決定する場合としない場合がある。調整決定の場合，調整が実施される場合と，実施されない，あるいは延期される場合がある。管理プロセスを用いて分析を行うことによって，留学生が実際に自分たちの人的ネットワークに関して，どのような問題を感じていたのか，また，問題に対処したのであればどのような調整行動をなぜ行ったかを分析することが可能となる。

４．調査概要

本研究では，関東の私立大学Ｔ大学に在学している韓国人短期留学生（表１参照）の協力を得て調査を行った。３名の韓国人短期留学生の留学期間は４ヶ月（2012年４月２日～８月７日）である。その期間中，被調査者である各留学生に対して４回のインタビューを行った。本稿では，この３名に対する縦断的調査で得られた結果を基に，彼らの人的ネットワークの分析を試みたい。

4.1　調査方法

インタビュー時間は基本的に１時間としたが，状況によって20分程度の増減があった。インタビューではすべて韓国語を使用し，１対１の対面形式で実施した。韓国語は筆者の母語でもあり，被調査者にとっても話しやすく正確に情報を伝達することができる。

筆者はあらかじめ準備した質問に答えてもらう構造化形式のインタビューに加え，自由に話してもらう自由インタビュー形式も付加し，半構造化インタビューの形式をとった。

インタビューを重ねていくうちに被調査者との距離も縮まり，二回以降のインタビューでは初回のインタビューより本音と思われる気持ちを語ってくれる傾向があった。

4.2　被調査者の属性と調査日程

３名の韓国人短期留学生は本国で全員，韓国のＨ大学の日本語学科に所属しており，日本語能力は「中上級レベル」と「上級レベル」である。（表１参照）

表１　被調査者プロフィール

被調査者	K1	K2	K3
インタビューの実施日	１回目　2012/5/18 ２回目　2012/6/15 ３回目　2012/7/10 ４回目　2012/8/2	１回目　2012/5/22 ２回目　2012/6/14 ３回目　2012/7/10 ４回目　2012/8/1	１回目　2012/5/31 ２回目　2012/6/15 ３回目　2012/7/13 ４回目　2012/8/2
性別	女性	女性	男性
学年（H 大学）	３年生	３年生	３年生
日本語学習歴	２年	２年	４年
日本語能力試験	N２ （新日本語能力試験）	２級 （旧日本語能力試験）	無し
来日経験	大学の１年生のときに北海道に旅行 （１週間）	2011年６月から2012年３月までワーキング・ホリデーで来日 （９か月間）	2008年１年生の時一人で旅行（約１週間）
日本語能力	上級	上級	中上級

4.3　インターアクション・インタビュー

ネウストプニー・村岡（2002：134）はインターアクション・インタビューは被調査者の記憶を遡って，彼らが参加していたインターアクション中の出来事や行動について聞き出すので，録音・録画や参与観察が困難な場合でも，実際の言語行動に近いデータを収集できると述べている。

インターアクション・インタビューの順序は次のとおりである。まず，１回目のインタビューの最初では研究目的と内容を説明し，理解してもらう。次に，インタビューに協力してもらいたいこと，インタビューで求めていることを説明する。それに加えて，自己紹介と共に日本のイメージなど留学の目的を質問し，これからの計画も質問した。ここまでが，インターアクション・インタビューを行う前の事前インタビューでこれらは初回のインタビューの時だけ実行した。

次は，インタビューの日にあった出来事と前日にあったことを時間を区切って思い出してもらった。そして，来日してからの出来事や週末にあった出来事なども遡ってもらった。２回目のインタビューからはさらにその間にあったイベントや出来事があれば，語ってもらった。さらに，写真を撮った場合はそれを見せてもらって，それを見ながらその当時のことを語ってもらった。すべてのインタビューはIC レコーダーによる録音を行った。本稿で掲載している被調査者のコメントはいずれも韓国語での発話を筆者ができるだけ忠実に日本語訳したものであ

る。本稿では主にそのデータを基にして，分析を行った。

5．分析・考察

5.1　ネットワークの形成者

人的ネットワークはどのようなきっかけから始まるのであろうか。本章ではそのネットワークが形成されるきっかけ及び形成されたネットワークの特徴について述べていく。

来日直後における被調査者の人的ネットワークは，既存のグループのネットワークへの参加から始まっている。被調査者は「日本語研修課程」に在籍しているため，あらかじめ決められている授業を履修することが一般的だった。また，授業以外で参加していたネットワークとしては，留学生支援の一環として行われている日本語支援ボランティアと日本人の学生主催の日韓交流サークルであった。これらの授業ネットワーク，日本語支援ボランティアネットワーク，日韓交流サークルネットワークがインタビューで主に言及された最初の主なグループ・ネットワークであった。

これらのネットワークは被調査者が他者からの調整行動によって作られたネットワークであるので，本稿では「他者調整ネットワーク」と呼ぶことにする。すなわち留学先である学校側の働きかけから形成されたネットワークや日本人学生が国際交流のために形成したネットワークを「他者調整ネットワーク」と呼ぶ。なぜなら，このネットワークは被調査者個人の意思により形成されたのではなく，他者によって事前に形成されていたネットワークだからである。それに対して，何らかの目的のために，被調査者自身の働きかけによって，他者調整ネットワークから派生したり，まったく新たなネットワークが形成されたりする場合を「自己調整ネットワーク」と呼ぶ。被調査者たちは，４ヶ月の留学期間において，最初の他者調整ネットワークだけではなく，自己調整ネットワークを形成し，維持しようとして，積極的に様々な調整行動をとっていた。どのような調整行動を実行していたのかについては後ほど5.3及び5.4で述べる。前述したとおり，本稿での人的ネットワークは同国人とのネットワークを含まず，他言語話者との間に形成される接触場面でのネットワークに限定する。

5.1.1　他者調整ネットワーク

あらかじめ学校側により形成されたネットワークや，日本人学生が国際交流のために形成したネットワークである他者調整ネットワークには，どのようなネットワークがあったのかみていく。３名に対するインタビューからは，「授業Ａ」，「授業Ｂ」，「日韓交流サークル」，「日本語支援ボランティア」の四つの他者調整ネットワークの存在が確認された。

①　授業Ａ

３名は韓国のＨ大学からの短期留学生であるが，ほかにも20名前後の韓国からの交換留学生がＴ大学には在籍している。この授業では，これらの韓国からの交換留学生とＴ大学の正規の韓国人留学生及び韓国文化に興味を持つ日本人留学生が参加している。この授業は韓国と日本の文化を比較する授業であり，お互いに相手の文化に興味を持つ学生たちが集まっ

ているので，活発にグループでのディスカッションが行われている。また，コースの最後にはグループで１ヶ月間に亘り準備が行われ，特定のテーマで発表が行われる。

② 授業Ｂ

日本の文化についての基礎知識を得る授業で，学部生と日本語研修課程の学生が共に履修できる。日本人対象の副専攻科目として開講されていて，日本人学生とともに学び，意見を交換することを目的の一つとしている。この授業では毎回異なる話題について説明を聞いた後，グループになって日本人と留学生で討論をする。しかし，毎回グループのメンバーが替わるため，自己調整ネットワークが形成されたケースは一つもなかった。せっかくの接触場面ではあったものの，留学生に比べて日本人側は留学生に興味を示さず，留学生側からは日本人から興味を持ってもらえないと積極的に行動できないというコメントもあった。授業Ａの場合は韓国に興味がある人の集まりであったが，授業Ｂに関しては，必ずしも履修している日本人学生が留学生に興味があるとは限らない。単に授業に参加するために来た日本人だったので，留学生の人的ネットワーク形成は困難であったと考えられる。

③ 日韓交流サークル

このサークルには韓国からの交換留学生とＴ大学の正規の韓国人留学生，及び韓国文化に興味を持つ日本人留学生が参加している。ここでは，様々な活動が行われているので，交換留学生にとって自己調整ネットワークが一番生起しやすい他者調整ネットワークであった。

④ 日本語支援ボランティア

この日本語支援ボランティアは，社会貢献や国際貢献を目的として活動している学内のボランティア団体のメンバーから主に構成されている。この日本語支援ボランティアの活動の一つとして，日本人と留学生からなるグループを作り，一週間に１回定期的に集まり，生活のことから，勉強のことまでをサポートするというものがある。

5.1.2 自己調整ネットワーク

本研究における自己調整ネットワークとは，5.1で述べたように，何らかの目的のために，被調査者自身からの働きかけによって，他者調整ネットワークから派生したり，まったく新たに形成されたようなネットワークを指している。他者調整ネットワークを自己調整ネットワークにつなげることが短期留学の満足度にも影響があったことがインタビューから明らかになった。他者調整ネットワークから自己調整ネットワークに広げていくためには留学生，日本人双方の努力が必要であろう。本稿では，5.1.1に挙げられた４つの他者調整ネットワークから派生した自己調整ネットワークに関していくつか言及するにとどめる。

まず，授業Ａと日韓交流サークルは韓国人留学生及び韓国文化に興味を持つ日本人留学生が参加しており，授業Ａを履修している学生のほとんどは日韓交流サークルにも参加している。特に，日韓交流サークルについては，学校や教師といった権力側から準備されたネットワークではなく，また部室以外の場所でも会うことができるので空間的制限も緩和される。さらにお互いに相手の文化に興味を持つ学生が集まっていることと，週に２回会えることから，多くの自己調整ネットワークができていた。しかし，授業Ｂから派生した自己調整ネットワークは見

られなかった。これはコミュニケーションにおける内容的制限があるため，興味のある話題を共有化する可能性が小さくなったことが挙げられよう。さらに授業Ｂの学生が留学生に特に興味があるわけではなく，単に授業に参加するために来た日本人だったので，留学生との人的ネットワーク形成には動機づけがなかった。このような要因が，自己調整ネットワークへの派生をいっそう困難なものにしたのではないだろうか。一般的に学校や教師側が準備したセッティングでは，自発的なネットワーク形成を，たとえ学校や教師が希望していたとしても，簡単に実現できないのが現実であろう。最後に日本語支援ボランティアに関しては定期的な集まりが義務だったために，４ヶ月間ネットワークは維持されていたが，インタビューからはネットワークに対して，満足している様子は見られなかった。日本人が留学生に対する理解が足りないこと及び異文化に対する理解が低い人に対して否定的評価をしていることから自己調整ネットワークが形成はされたものの，それが維持されることはなかった。

5.2　ネットワークの媒体

人的ネットワークにおいて参加者はどのような媒体を使い，ネットワークの形成，維持をしているのだろうか。媒体によってはネットワーク形成の阻害要因になることもあるし，反対にネットワーク形成を促進させる要因にもなるだろう。本節では，そのような要因について分析を行う。

ネットワークは，メッセージを伝えるための参加者の配列であるが，そのネットワーク内でメッセージを伝達する役目を果たすものが媒体である。媒体には以下のようなものがある。

⑴　話しことばか書きことば

⑵　非言語的手段（例えば，視線，顔の表情，動作，距離など）

なお，それぞれの媒体において，それを拡張するものとして，電話，印刷，電子メールなどの手段が使える（ネウストプニー1997：192）。

先行研究でよく取り上げられる媒体は対面によるコミュニケーションやメール，電話であった。しかし，本研究の被調査者はこれら以外にも，フェイスブック（SNS：Social Network Service の一つ）[2] やスカイプ[3]，無料メールアプリ[4] がインタビューの時に言及された。対面コミュニケーションを取ることは時間や場所の制限もあるため，短期留学生にとって，これらの媒体は対面していなくても，ネットワークを維持していく有効なツールであったと考えられる。それでは，どのように使われていたのか分析を試みる。なお，以下のコメント例の「K2-1」は K2のコメントの一つ目であるとことを表し，「第１回インタビュー」は１回目のインタビューで収集されたコメントであることを表している。

【K2-1：第１回インタビュー】

「日韓サークルで飲み会に行きました。飲み会で男の子と話をしていたらスカイプを持っているのかという話が出て，ID を交換しました。それから，スカイプで音声通話をたまにします。韓国語を勉強している友達なので，その友達は韓国語に関する質問をしたりします。私が色々教えるときは日本語を使って教えています。」

【K3-1：第１回インタビュー】

「日本語支援ボランティアの集まりでバーベキューがあって行きました。ここで知り合った友達とメールの友達とフェイスブックの友達になりました。」

来日直後１回目で選択された媒体は対面によるコミュニケーションであったが，それと同時にスカイプやフェイスブックの話が持ち出され，それを媒体とした友達にもなった。ちなみにスカイプやフェイスブックなどの媒体の使用を提案するのは，本研究では日本人から持ち出されることが多かった。K2のコメント K2-1から，飲み会の場で，ある日本人学生とスカイプによるコミュニケーションが形成されたことがわかるが，その際，同時に K2は「韓国では，スカイプを使用する機会は少なかったですが，日本に来てから使おうと思っていました。」とコメントをしていた。また，K2もフェイスブックを韓国ではほとんど利用していなかったが，日本に来てから時折するようになったとコメントしていた。これは，日本人学生との接触場面ではフェイスブックがコミュニケーションを維持するための有効な媒体であると認識されていたことを示している。

【K1-1：第２回インタビュー】

「授業やサークルで１週間に１回会う友達とはフェイスブックでもよく会っているので，友達が載せた写真を見て，たまにコメントをしたり，《いいね[5)]》を押したりしています。それから，次の日とかその友達に会ったときに日本人の友達からコメントしてくれてありがとうと聞いたことがあります。道端で会ったときにただ挨拶だけをするのではなくて，フェイスブックの話もするので，話題が増えます。」

【K3-2：第２回インタビュー】

「フェイスブックで友達の写真を見ますが，コメントはあんまり書かないです。今まで習った日本語とフェイスブックで男の子が使っている日本語が結構違っていたので，書くのがちょっと恥ずかしいです。書いたら他の人にも見られるので，今はたまに《いいね》のボタンだけ押しています。」

２，３回目のインタビューでも，主に対面によるコミュニケーションとフェイスブックの話題が出ていた。さらに，３名ともフェイスブックを利用して形成されたネットワークを維持していることがインタビューから報告された。

【K1-2：第４回インタビュー】

「短期留学で来たので，携帯を作ることが難しく，先払いの携帯を使っていました。しかし，３ヶ月毎の更新だったので，最後の１ヶ月だけは電話の受け取りしかできません。メールを送ったりすることが出来なくなり，携帯メールだけで連絡していた友達とは連絡がとれなくなりました。友だちのフェイスブックでも知っていたら，フェイスブックで連絡をすれ

ば良かったですが，フェイスブックの登録をしませんでした。」

【K2-2：第４回インタビュー】
「バーベキューのイベントでフェイスブックの友達登録をしていた友達がいましたが，実際に会う機会が今までなくて，フェイスブックでもお互いに話は全然していません。」

【K2-3：第４回インタビュー】
「最近，日本人の友達はテスト期間でなかなか会えないので，フェイスブックでコメントを書いたりしています。テスト期間が終わったら，私たちは韓国に帰りますが，韓国に帰ってからもフェイスブックで会えばいいので，韓国に遊びに来る約束も帰ってから決めようと思っています。ライン（無料メールアプリ）を使えば，韓国でも友達と話が出来るので，帰っても連絡を続けます。」

第４回インタビューでもフェイスブックの活用は頻繁であった。対面コミュニケーションで埋められないところを，このような媒体を使って容易にお互いのネットワークの維持を行っている様子が観察された。しかし，携帯電話も一つの媒体として手軽さからよく使われていたが，K1のように途中から媒体がなくなると，それに影響を受け，ネットワークが弱くなり，消滅するということもあった。携帯電話の代わりにフェイスブックやパソコンメールなどを使っても連絡はできると思われるが，K1はそういった問題に留意をしても，調整行動をおこすまでには至らなかった。それは，そのネットワークをそこまで維持する必要性がなかったからであると思われる。それについては後ほど5.4.1で述べることにする。

5.3　ネットワーク形成の阻害要因と促進要因

5.1及び5.2ではどのような人とネットワークが形成されるのか，すなわちネットワークの形成者，また，どのような媒体を使用するのかについて述べてきた。本節では，ネットワーク形成を阻害する要因と促進する要因について分析を試みる。

5.3.1　ネットワーク形成の阻害要因

本研究における短期留学生３名は第１回のインタビューで，いずれも日本人とのネットワーク形成を希望して来日したと述べている。韓国で日本語を勉強していても日本人の友達をつくることができなかったので，今回の日本への短期留学では積極的に日本人に働きかけてネットワークを作っていきたいとコメントしていた。K3は韓国でも積極的に友だちと接するタイプであったが，日本ではいっそう積極的にコミュニケーションをとろうしたと述べている。１回目のインタビューで，「日本人の友達を作るためにどのような努力をしていますか」と質問をした。

【K3-3：第１回インタビュー】

「寮に遊びに来る友達がいれば積極的に話しかけたりしています。韓国でも積極的ですが，国では友達を作るためにここまで積極的にはしないと思います。積極的に話しかけても，相手の反応があまりないと，その人と友達になるのは難しいですね。」

【K3-4：第２回インタビュー】

「交換留学生で来ている男性の留学生は数が少ないし，韓国でも仲が良かった友達です。ですから，少ない人数でほとんど一緒に行動しているので，個人行動が難しいです。一緒にいると韓国人だけの集まりになるので，個人で行動して，日本人の友達をもっと作りたいです。週末も日本人の友達と遊びに行きたいですが，学校の先輩が日本に就職していて，いつも呼び出すので，行かないわけにはいかないし，仕方なく韓国人だけ集まることが多いですね。」

まず，K3が在籍しているＴ大学の寮は留学生だけが住んでいる寮であり，日本人のスタッフが５名いて，そのスタッフの友達が寮にたまに遊びに来るという。K3は友達を作るために，寮に来る日本人学生ならだれにでも積極的に声をかけるようにしていると述べている。しかし，K3-3のコメントのように日本人学生の反応がないと友達にはなりにくいと言っていた。つまり，友達を作るためにまず話しかけるということから始めているが，その人の反応をみて，興味を示さない場合，それを否定的に評価し，それ以上の調整行動を行わないということである。

さらに，K3-4のインタビューからは，韓国人気質が垣間見られる。韓国人の男性は義理をとても大事にする。韓国で仲が良かった友達とは，日本にいるからといって別々で行動することがなかなかできない。２回目のインタビューでもこのような理由で個人行動ができなかったと述べており，韓国の社会文化規範に沿った行動をしていたと言えるが，一方でこの社会文化規範の適用に否定的評価を感じている。Ｋ３は積極的に働きかけようと心がけてはいるが，この韓国の社会文化規範を適用しているため，日本人とのネットワーク作りの限界に悩んでいた。

【K1-3：第１回インタビュー】

「友達を作るために日韓交流サークルに参加してみたのですが，かなり大人数がいて，友達を作ることがまだ出来ません。毎週参加はしていますが，いつもグループを変えて活動をしていて，毎回違う人とグループになるので，特定の人と仲良くなるのが大変です。もし，一対一でペアを決めて，サークルのときに活動すれば，とても仲良くなると思いますが。最初の集まりでは飲み会にも出席してみたのですが，日本人の出席率が低くて，飲み会で学部生の韓国人留学生と友達になりました。でも，韓国人の友達ができたこともうれしいです。大学から20名ほど留学に来ているのですが，韓国で仲が良かった友達は一緒に来なかったので，寂しいこともありました。韓国人の留学生と仲良くなって最近よく飲み会をしたりしています。」

K1はサークルで毎回違う人とグループになるので，友達になりにくいと日韓交流サークルの活動に否定的評価をしていた。ペアを固定してほしいと思っているが，それをサークルの代表者などに伝えたりするといった調整行動はとっていなかった。しかし，日本人とのネットワークはこの時点では形成されていなかったものの，韓国人とのネットワークはすぐ形成された。飲み会で日本人があまり来なかったと否定的な評価をしている。しかし，韓国人とは同じ留学生という共通点もあり積極的に友達になるように働きかけができたと思われる。筆者はK1に友達を紹介したり，食事に行ったり，遊びにも一緒に同行した。そのときの様子からK1は，韓国人だけでいると活発で話上手だが，日本人や他の国の人がいると少し大人しくなる傾向があることが分かった。日本語のレベルは上級であるが，やはり韓国で日本語を学習していたので，実際使用場面の経験は少なかったのであろう。来日して約１ヶ月目であったので日本語で会話することにも慣れておらず，積極的に日本人と接することもできなかったと考えられる。

【K2-4：第２回インタビュー】

「日本語支援ボランティアの集まりでバーベキューがあって，それに参加しました。日本人の男の子二人と私の韓国人の友達一人と話をしましたが，日本人からフェイスブックを持っているかと聞かれました。その時からフェイスブックの友達にはなりましたが，バーベキューが終わってからは会う機会もなく，ただフェイスブックの友達だけで，それ以上の友達までにはなれなかったです。」

K2が参加したイベントは日本語支援ボランティアが主催するイベントで，日本語支援ボランティアを行っている人と留学生がこのイベントに参加していた。そこで知り合った日本人から今後も続けて連絡を取りたいからフェイスブックを持っているかどうか聞かれ，その場で日本人から友達の申請をしたようだ。しかし，このイベントが終わるとお互いに会う機会がなく，ネットワークを維持しようとする調整行動も行わなかったので，結局，単発的なネットワーク形成で終わってしまった。

このように，日本人の友達を作りたいという希望を３名とも持っているが，１，２回目のインタビューでは思うようにいかない様子が見られた。上記のことからネットワーク形成の阻害要因として少なくとも次のようなものが挙げられる。

①日本人側の無関心
②性格的要因
③個人行動の難しさ

5.3.2　ネットワーク形成の促進要因

一方，被調査者のネットワーク形成が促進された要因としては，まず始めに日本人が韓国に興味を持っていたことが挙げられる。

【K3-5：第２回インタビュー】

「バーベキューのイベントで知り合った友達ですが，日本人からどこの国の人ですかと聞かれて，韓国人ですと答えたら，韓国のことが好きです，と話してくれました。その人とメールアドレスを交換して，メールを頻繁に交換する友達になりました。その人が韓国に興味を持ってくれることがとてもうれしかったです。５年ほど前に旅行に来たときには韓国人と言ってもあまり反応がなかったですが，今は全然違いますね。」

日本人が韓国に興味を持っていることを肯定的に評価し，お互いに相手国に関心を持っていたことから親近感を持つに至っている。バーベキューのイベントでこのようにネットワークが形成されたが，ネットワークがどのように発展し，維持されるかはまた別の問題である。

【K1-4：第２回インタビュー】

「日韓サークルと授業でもたまに会っていた友達ですが，授業中同じグループになりました。今までも話はしたことがありますが，同じグループになってもっと話ができたと思います。グループ活動をしている時に食べ物の話題でお好み焼きの話が出ました。私が日本で食べたいと言ったら，日本人の友達から食べ放題があるから一緒に行こうと誘ってくれました。しかし，大人数になったことで，私はその時には行かないで，誘ってくれた友達にメールをして，二人で行くことにしました。」

K1はグループでいると大勢の中では積極的に話が出来ないといったおとなしい性格である。そのことから，今回は自ら日本人にメールをして，別の機会に二人だけで行こうと誘う調整行動を実行した。後のインタビューでは，二人で行ったので話しやすく，とても楽しかったとコメントをしていた。自分が大人数でいると積極的にコミュニケーションができないということを否定的に評価し，自分なりの方法を見つけて，自己調整ネットワークを形成することに成功した。

ネットワーク形成が促進する要因として，本稿では例で説明したものに限って要因を挙げる。

①日本人側の韓国への関心度
②性格的要因
③グループ活動

5.4　ネットワーク維持の阻害要因と促進要因

１回目や２回目のインタビューで報告された人的ネットワークを彼らはどのように維持していたのだろう。崔（2007）はネットワークをうまく維持するためには，お互いに維持しようとする意思がないとできないと述べている。本節では，形成されたネットワークを維持するためにどのような阻害要因や促進要因があるのかについて分析していく。

5.4.1　ネットワーク維持の阻害要因

被調査者３名は１回目及び２回目のインタビューで複数の人的ネットワークが形成されていたことを証言している。しかし，３名はネットワークの維持に悩んでいる様子が伺えた。K1の場合は，筆者が紹介した友達と二人だけで会って，日本語の勉強をしたり，食事をしたり，海外旅行の経験などについて話をしていた。しかし，二回目に会うことはなかったと述べていた。

【K1-5：第３回インタビュー】

「その友達とは会った時に話も通じて，とても楽しかったです。日本語の発音も直してくれたり，レポートの日本語の表現もチェックしてくれました。でも，それからメールで遊びに誘ったりしましたが，予定が合わなくて，２回くらい断られるとさすがにまた誘うことはできませんね。メールをした時にいつも忙しそうで，忙しい人だなと思い，私から連絡しなくなりました。向こうからも連絡が来ないので，多分，忙しいみたいです。」

K1はネットワークを維持するために積極的にメールをし，また会う機会を設けようとしていた。しかし，相手との予定が合わなかったことから，ネットワークが消滅してしまった。メールで連絡はしたが，韓国に戻る１ヶ月前には携帯電話のメールもできなくなったので，このネットワークはここで終了したことになる。維持できなかった要因としては，予定が合わないこともあったが，留学生にとって日本人は日本語の勉強にもなり，会っていて楽しい相手でもあるが，日本人にとっては同等のメリットが感じられなかったことが日本人のインタビューからわかった[6)]。

K2も２回目のインタビューで消滅したネットワークがあった。「日本語支援ボランティアは最近どうですか」という質問に，次のようなコメントが返ってきた。

【K2-5：第２回インタビュー】

「日本語支援ボランティアは最近あんまり行かないです。最初は日本語の勉強にもなるし，友達もなれると思って参加していましたが，最近は面倒くさいです。日本人が二人いて，私ともう一人の留学生がいます。でも，日本人の女の子はまだ学年が１年と２年で歳も違うし，留学生に対する理解が足りない気がします。それを説明したりするのは難しいのですが，海外にあまり行ったこともなくて，高校を卒業してあまり経ってないので，話が合わないです。」

このコメントから，K2が日本人の留学生に対する理解が足りないことに問題を感じ，それに対して否定的評価をしていることが伺える。日本語支援ボランティアの活動はあくまでもボランティアであり，ある程度，理解した上で留学生に役に立ちたいという思いで参加しているのだろうが，実際の接触場面ではお互いに上手くいかないことも存在する。留学生側の問題は日本人側に共有されていない可能性もあるため，今後の活動改善のためには接触場面参加者全

員での問題共有が必要であろう。いずれにしても上記の原因により，日本語支援ボランティアのネットワークも維持できなかった。日本語支援ボランティアのネットワークに関しては以下のコメントからわかるように，K3にも弱化する傾向が見られている。

【K3-6：第４回インタビュー】

「日本語支援ボランティアの集まりは勉強に役に立たないです。私のグループは日本人が二人ですべて男性です。最初は男の子が使う言葉も教えてもらって面白かったのですが，最近は集まって話す内容は韓国の女の子を紹介してという話ばっかりです。その話にはもう飽きたので，集まりに行きたくありません。韓国に帰ったら連絡しないと思いますが，一人の１年生は日本と韓国はとても近い距離なのに，韓国がどこにあるのかも分かっていないのです。それは，ちょっと理解しがたかったです。」

日本語支援ボランティアの団体は日本語支援団体であるが，コメントからはメンバーの中に異文化に対する理解が低い者がいて，その結果，K3の否定的評価を招いていたことがわかる。K3は韓国に対して興味はなくても，基本的な常識は持っているべきであろうとコメントをしていた。

このように，ネットワークの維持の阻害要因を上記のことから少なくとも三つ挙げることができよう。

①一方向的な関心
②異文化に対する理解度
③日本語学習への非有用性

5.4.2　ネットワーク維持の促進要因

一方，本研究では，被調査者３名とも自分なりに特定のネットワークに関しては，それぞれ維持に成功しており，それに対して満足しているというコメントをしている。本節では，そのネットワーク維持の促進要因について分析を行う。

【K2-6：第４回インタビュー】

「Ｓさんは日韓サークルと授業Ａでよく会っている友達です。サークルが終わってから，私から食事に誘ったり，Ｓさんが誘ってくれたりしています。韓国語を勉強していて，韓国語もとても上手な友達です。性格も明るくて，友達もたくさんいるので，この前はＳさんの友達も一緒に参加して，家でたこ焼きを食べたりしました。私も韓国料理を作って一緒に食べて，本当に楽しかったです。Ｓさんの恋愛相談にも乗ってあげたりしています。」

【K1-6：第４回インタビュー】

「日韓サークルで仲良くなった友達がいます。その友達は男性で，二人で食事に行ったことはありませんが，学校の食堂でよく会います。会うと食堂でおしゃべりが始まって，結構

長く話をしたりしますが，とても楽しいです。韓国語も上手で，スマートフォンでよくチャットもしていますが，韓国語と日本語を使って話しています。私たちが韓国に帰ったら，韓国にも遊びに来ると言っていたので，韓国でもまた会うと思います。」

K2及びK1とネットワークを形成していた日本人は，二人とも韓国に興味があり，韓国語もできる学生であった。ネットワークの参加者はお互いに関心があることから，ネットワークの維持も容易であったのであろう。K2の場合は，悩み相談までしていて，内的場面の友達と変わらない関係にまで発展しているように見える。

このように被調査者３名はネットワークを形成し，それを維持することにも成功した。紙幅の関係上本稿においては二例を挙げたが，３名ともネットワークの維持に対して満足感を示していた。ネットワーク維持の促進要因は次のようにまとめることができる。

①性格要因
②韓国に対する関心度
③接触する頻度
④遊興活動

5.5　分析のまとめ

以上，３名の留学生に対するインタビューをもとにそのネットワークの形成者，ネットワークの媒体，ネットワーク形成の阻害要因と促進要因，ネットワーク維持の阻害要因と促進要因について議論をしてきた。

本研究における留学生は留学当初から他者調整ネットワークが準備されていたため，そこに参加して，さらに自発的な活動によって自己調整ネットワークに結びつけることができた。ネットワークの媒体に関しては，時間的に頻繁に会えない時はフェイスブックやスカイプ，スマートフォン，携帯電話メールの利用が，ネットワーク維持のために有効に活用されていた。

一方で，ネットワークの形成が上手くいかなかった要因としては，日本人側の無関心や性格的要因，個人行動の難しさがその阻害要因として挙げられた。逆に，ネットワークの形成に有効な要因としては，日本人側の韓国への関心度，性格的要因，グループ活動が挙げられる。しかし，ネットワークが形成されても，維持できなかったケースも多い。その要因としては，一方向的な支援，異文化に対する理解度，日本語学習への非有用性などが挙げられる。一方，ネットワーク維持の促進要因は性格要因，韓国に対する関心度，接触する頻度，遊興活動が挙げられる。

６．おわりに

本稿では，韓国人短期留学生が実際にどのように人的ネットワークを形成しているかを調査し，それを維持するためにどのような調整をとっているのかについて，インターアクション・インタビューの手法を用い，縦断的調査を行って，分析を試みた。

分析の結果，３名は接触場面であることからより積極的に行動を取っていた。しかし，相手側から関心を示されないと，積極的に行動を続けることはできなかった。韓国に興味がある日本人学生の授業及びサークルの存在が今回の被調査者にとって大きな役割を果たしていたと言える。しかし，被調査者のインタビューから日本人側の異文化に対する理解度が足りないことが明らかになった。加藤（2010）は多文化共生が課題となっている現在，日本全体がいかに異文化の人々とつきあい方やネットワークの不備を問題として留意していくか，それが今後の多文化共生成功への鍵となると述べている。このように，異文化理解の教育をさらにしていく必要もあり，留学生を受け入れる側としての大きな課題であろう。

今後の課題として，留学生のネットワークにおける変容についてさらなる分析を行いたい。また，より正確で詳しいデータ収集のためには研究方法についても工夫が必要であろう。

注

1）言語能力は，音声や語彙を含む文法能力を指し，社会言語能力は，Hymes（1972）のSPEAKINGモデルの要素を応用したネウストプニー（1995 a）の点火のルール（どんな場合に何の目的を持ってコミュニケーションを始めるのか），セッティングのルール（いつ，どこでコミュニケーションを行なうのか），参加者ルール（誰とコミュニケーションを行ない，コミュニケーションの人脈を形成していくのか），バラエティルール（ある方言，ある文体やスタイル，あることばの調子の中からどれを選択するのか），内容のルール（何を伝えるのか），形のルール（内容をどのような順番や形式にするのか），媒体のルール（音声，文章，身振り手振りなどの物理的な媒体の中で，どれを選択するのか），操作のルール（自身や相手のコミュニケーションに対してどのような評価や行動をするのか），運用のルール（以上のルールを必要な時に正しく運用できるのか）の要素を含めた能力である。社会文化能力は様々な社会文化の要素から構成される能力であり，主要な領域は次の通りである。日常生活領域，家庭領域，交友領域，教育領域，職場領域，公的生活領域，サービス領域，娯楽及び文化領域がある。

2）フェイスブック：アメリカ発のSNS（SNS：Social Network Service）サービスで，ウェブ上で利用者同士が人脈を形成できるサービスである。

3）スカイプ：インターネットを使い音声無料通話が出来るプログラムである。チャットの機能もある。

4）モバイルのコミュニケーションアプリ：スマートフォン同士であれば，アプリを通して，メールや通話が出来るコミュニケーションアプリである。世界の人々が使っていることもあり，気軽に友達とコミュニケーションを取ることが可能になる。日本でよく使われているコミュニケーションのアプリの中でラインというアプリがあるが，このアプリの発祥地は韓国であり，韓国人も日本人もよく使っており，コミュニケーションが取りやすい。

5）フェイスブックで写真やコメントに対して，コメントを書かないで「いいね」というボタンを押す。どの人が自分の写真やコメントに共感してくれたのかが分かるフェイスブックの機能の一つである。

6）これについては現在執筆中の別稿においてくわしく述べる。

参考文献

内海由美子・吉野文（1999）「短期留学生の日本語実際使用場面の実態と分析―ネットワークの観点から」『千葉大学留学生センター紀要』５，30-55

加藤好崇（2010）『異文化接触場面のインターアクション―日本語母語話者と日本語非母語話者の

インターアクション規範』東海大学出版会
加藤清方・谷部弘子（1997）「短期留学生の学習ネットワーク　日本語教育学会ネットワーク調査研究委員（編）」『国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究―最終報告書』平成８年文化庁日本語教育研究委嘱，pp. 113-121
武田加奈子（2002）「短期留学生のネットワーク調査：言語管理プロセスの観点から」『接触場面における言語管理プロセスについて（Ⅱ）村岡英裕　社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第38集』千葉大学院　社会文化科学研究科，pp. 71-85
崔秀璟（2007）『韓国人日本語学習者のネットワーク管理―短期留学生のネットワーク・ストラテジー」東海大学大学院文学研究科日本文学専攻修士課程提出論文
日本語教育学会（編）（1995）『ひろがる日本語教育ネットワーク―最新事例集』大蔵省印刷局
ネウストプニー，J. V.（1995a）『新しい日本語教育のために』大修館書店
ネウストプニー，J. V.（1995b）「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』７，pp. 67-82
ネウストプニー，J. V.（1997）「日本語教育とネットワークの考え方―ネットワーク研究のためのガイド―」『国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究　最終報告書』日本語教育学会 pp. 181-196
春原憲一郎（1999）「学習ストラテジーとネットワーキング」宮崎里司・J. V. ネウストプニー（編）『日本語教育と日本語学習―学習ストラテジー論にむけて』くろしお出版，pp. 183-195
朴金秋（2004）「近状的学習論から見る東アジア留学生のネットワークの構築―短期留学生３名に対する縦断的調査をもとに―」『留学生教育』第９号，JAISE，留学生教育学科，pp. 127-140
村岡英裕（2002）「質問調査：インタビューとアンケート」J.V. ネウストプニー・宮崎里司共編『言語研究の方法：言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』くろしお出版，pp. 125-43
Hymes, D.（1972）Models of the Interaction of Language and Social Life. In J. J. Gumperz & D.Hymes（Eds.）, Directions in Sociolinguistics : The Ethnography of Communication（pp. 37-71）Blackwell